三重大学は三重県の県都・津市に立地する地域圏大学として、
さまざまな分野で市や地元企業との連携を進めています。
今回は松田直久津市長をお招きし、「まちづくり・ひとづくり」をテーマに
街の活性化や人材育成での連携について、学長と語り合っていただきました。

◎特集／対談

まちづくり・ひとづくり

津市長 松田直久 ＋ 学長 内田淳正

◎司会・進行
鈴木宏治
すずきこうじ
理事・副学長（研究担当）
専門分野は、分子病態学・
血栓止血学・血液凝固学

豊かな自然と滋味が揃う住みやすい街・津

司会　本日はお越しいただきありがとうございます。津市と三重大学は2009年に包括連携協定を結びさまざまな活動を展開していますが、本日はまちづくり・ひとづくりを中心にした地域連携の将来像についてお考えをうかがえればと思います。まず、津市の概況についてご説明いただけますか。

松田　現在の津市は2006年、全国的にも稀な10市町村の合併（※1）により誕生しました。面積約710平方キロメートル、人口約29万人の都市となったがゆえに、私は市政運営の基本として、「一体感の醸成」を掲げてきました。これは各地域の文化を一つに統合してしまうということではなく、それぞれの地域の特色を大切にしながらすべての方に新しい津市のことを考えていただきたいという想いが根本にございます。それと同時に元気なまちづくりを目指し、その基礎固めをしてまいりました。津市は昔から住みやすい街とおっしゃっていただいていますので、そのオリジナリティを活かしていくために「住みやすさに磨きをかける」まちづくりを基本とさせていただいております。

内田　私も15年前に津に赴任し、この街の魅力についてはよくわかるようになってきました。東京や大阪などにも住みましたが、津ほど住みやすいところはないというのが実感です。この街は人が住むのにちょうどいいサイズですし、自然環境や食べ物、人情など、いろいろな要素が他よりも優れているのではないでしょうか。本日の対談場所である人文学部の学生ラウンジにも津や三重の特産品の写真を飾り、机や椅子などには三重県産の木材を使っていますが、これだけでも身近に素晴らしいものが揃っていると感じます。このラウンジは今年の3月に学生がデザインして作ったものです。とても和やかな雰囲気が好評で、本日のテーマにふさわしいものと思い設定させていただきました。

松田　素晴らしいラウンジにお招きいただき、ありがとうございます。ご存知のように津には海があり、白砂青松を含む多様な海岸線が広がっています。夏には潮干狩りや海水浴が楽しめ、マリンスポーツのできる素晴らしいハーバーもありますし、鈴鹿山系の山々が連なり、日帰りできるハイキングルートが何百とあります。ゴルフ場の数は全国屈指で料金も安く、桜の花見も美杉地区から芸濃地区、津地区まであらゆる場所で楽しめます。お魚は近海物が豊富で、お肉のおいしさは言うまでもありません。気候が温暖ですから野菜の種類も多く、すべて地産地消でまかなえるわけです。本当に住みやすい環境が整っていますので、これをもっと強く世間へ打ち出していきたいと思います。加えて、働く場所のあることが街の活力につながりますから、企業誘致にも力を入れているところでございます。

地域医療の中核病院として救急医療を支援していく

司会　津市の目指すまちづくりに対して三重大学がどのように関わっていくのか、特に地域医療の面についてお考えをお聞かせ願えますか。

内田　やはり三重大学が持っているシーズや知識を、もっとまちづくりの中で活かしていくことが大切だろうと思います。特に地域医療については、中心的な役割を担うことが大学病院には求められています。三重大学の医学部の前身は1943年にできた三重県立医学専門学校であり、その母体は1910年にできた津市立病院です。津市の方が三重大学の附属病院を自分たちの病院だと思っていただけるのはこうした歴史的な背景があり、私どもも期待に応えるべく今まで以上に貢献したいと思っております。市長が重要視される救急医療に関しては、安心・安全のまちづくりの中心となるのは一次・二次医療ですので、附属病院が市内の病院へ医師を派遣して支援していきます。また、それらの病院では対応できない三次救急については本年6月に救命救急センターが整備されますので、センターの機能を充実するという形で協力していきたいと考えています。

松田　大学にはいろいろな分野でご協力いただいておりますが、医療分野においての支援は津市や三重県にとって必要不可欠なものです。二次救急輪番病院の専門医不足は大きな問題でしたが、医師会や附属病院からの医師派遣に加えて、輪番病院と附属病院をインターネットで結ぶ画像遠隔医療システムの整備によって受入態勢が強化されました。ただ、なかなか一次・二次・三次医療の違いが患者さんからすればわかりにくく、その住み分けは私どもが思っているより難しいところがございます。これをいかにシステム化していくかがこれからも課題だろうと思っています。市がそうした面から医療機関をフォローすることが医療ネットワークの充実につながっていきますので、さらなる整備を進めてまいります。

「今までは連携することに意義があったのでしょうが、
これからは結果をどう出していくかが求められます」

中心市街地の再生に向けて学生たちもまちづくりに参加

司会　全国の地方都市が抱えるまちづくりの課題の一つに、中心市街地の空洞化がございます。津市の取り組みについてお話しいただけますか。

松田　中心市街地とは市域の皆さんが集える魅力のある場所であり、一言で言えばコンパクトシティです。その再生に津市の未来はかかっているわけですが、これには特効薬はなく縦の糸と横の糸が重なり合うことで活性化されるものだと思います。市民の皆さんも行政も少しずつ努力していくことによって、気づいたときには人が集まり、それがまた相乗効果を生む、そんなまちづくりが必要でしょう。そのためには、まず中心市街地に多くの方々に住んでいただき、新たな人口を創出することが求められます。コンパクトシティと申しましたが、中心市街地には交通インフラや情報インフラは全部揃っているわけですから、この住みやすさに磨きをかけていくことで居住していただけるきっかけを提案しなければなりません。もちろん行政だけではなく、民間の方にも魅力を感じて動いていただくために、これからいろいろなシミュレーションをしていきたいと考えております。高齢社会ですからお年寄りの住みやすさも大切ですし、三重大学の学生さんの中にも中心市街地に住みたいという方もたくさんいらっしゃると思います。その方々にどうしたら住んでいただけるのだろうかと考えるのは、難しくも楽しい課題であると感じております。

内田　中心部の活性化を含めて、街が若者にとって楽しい場所であるということは非常に大切な要素です。三重大学の卒業生で三重県や津市に残る人がそれほど多くない原因の一つは、これまで若者にとってまちの魅力が乏しかったのだろうと思います。ただ、今は津駅近辺にはどんどん新しい店ができ、人が集まるようになってきています。若者も中心街である大門の真ん中に快適な居住空間があれば住みたいと思うでしょう。三重大学では中心市街地の活性化を目指し、学生たちが「つ・だいもん学生マルシェ」(※2)というイベントを大門大通りで開催しましたし、野村證券・百五銀行と共同で行っている創業革新プロジェクト研究室(※3)を中心街に移転しました。他の催しでも市と大学が協力し、若い人が津に残ってくれて住みやすさも向上するような好循環をつくらなければなりません。

また、市長のおっしゃるように、高齢者が中心街に帰ってくる流れはあるでしょう。今までは郊外の一軒家に住んでいた方も、足腰が弱くなると便利な中心街に魅力を感じるはずです。それにアメリカではリタイアした人が気候の良いフロリダや西海岸に移住し第二の人生を楽しんでいますが、日本もだんだんそういう時代になりつつあると思います。津はハイキングやゴルフが楽しめる自然環境や設備が整っていますし、都会に比べると格段に安くおいしいものが手に入り、非常に心豊かな生活ができるのは間違いありません。私はリタイア世代に津市の住みやすさを強調していくことも、今後は重要だろうと思います。

松田　60歳からの第二の人生を送る場所として、ぜひそういう世代の方にも津市に来ていただきたいですね。また、これまでの人生経験や本物を見る目を活かしてお店を出していただくなど、第二の人生で何かをやってやろうという意欲ある方への支援やチャンスがたくさんある場所というアピールができれば、夢を持って来ていただけるのではないでしょうか。人生経験豊富でしっかりとした価値観を持っていらっしゃる方に来ていただくと、まちづくりはひとづくりとイコールですので、人に感化されて街も文化都市へと成長し、付加価値がついてくるものと思っています。

内田　60歳で今までの仕事が終わったとしても、70歳位まではまだまだ労働意欲というのは旺盛です。そういう意味では新たなチャレンジができる受け皿を市がつくってくだされば、街の発展の可能性もどんどん広がっていくはずです。また、津市は文化的な素地は非常に高いものがあります。リージョンプラザや県総合文化センター、県立博物館などがあり、大学も公開講座を行っていますので、さまざまな文化や知識にふれられる環境が整っています。高齢者にとっても若い人にとっても楽しみの多い街ですから、それをまちづくりに組み込んでいくことが必要でしょう。

松田直久
まつだなおひさ
津市長
大阪産業大学卒業
衆議院議員秘書、三重県議会議員を経て、2006年2月より現職

市との連携の幅を広げさらに地域に開かれた大学へ

司会　今、お話に出ましたが、まちづくりの根本にはひとづくりがあると思います。地域のひとづくりに関する市と大学の連携についてお考えをお聞かせ願えますか。

内田　大学は地域に開かれた知の拠点です。地域の皆さんに大学に来ていただいて、公開講座も含め大学の研究内容や活動状況を積極的に見ていただきたいと思っています。そして、多くの方々に大学でいろいろな知識を身につけていただきたいですし、それを社会で活用していただくことも大学の使命の一つと考えています。また、大学の持つ知財を活かし、市と一緒にシンクタンクとしてまちづくりやひとづくりのプランニングに参加していくことも大学の役割であると思っています。こうした広い連携ができれば、この地域における大学の存在感や役割もますます大きくなるのではないでしょうか。

松田　酒造り体験事業(※4)を生物資源学部の学生さんにやっていただいたり、三重大学に「津市げんき大学」(※5)の分校をつくっていただいたり、大学にはさまざまな形で街へ出てきていただき本当に感謝しております。ただ、市民からするとキャンパス内には一般の者は入れないのではないかと思い、なかなか踏みこんでいけません。行ったことがないし、何をしに行ったらいいのかわからないという方も多いと思いますので、市民が大学を訪れる機会を増やしていただくために、市のイベントを大学で行わせていただくといった連携もあるのではないでしょうか。また、津市にはスポーツ団体もありますので、スポーツを軸にした新しいコミュニケーションを企画し、人と人とをつなげたら、もっといい形の連携の輪ができるのではないかと感じております。例えば、大学のスポーツクラブと市の体育協会がタイアップして子どもたちに教えるなど、そうした活動をやっていただいたらいいのではないかと思います。

内田　大学には三翠ホールやレイモンドホールもあります。ぜひ市民に向けたいろいろな催しを、市と大学が一緒になって行わせていただきたいと思います。スポーツでの連携も面白いですね。大学の野球部や陸上部の学生が地域の子どもたちを指

「地域圏大学として地域に根ざし、地元に貢献できる『人財』を育てることが三重大学の重要な役割です」

内田淳正
うちだあつまさ
学長　医学博士
専門分野は、整形外科学

導することで子どもたちも成長できるし、学生たちも指導というプロセスを通して進歩することができるでしょう。また、社会人チームと一緒にプレイするなどいろんなチャレンジをすることが、学生にとっても地域にとっても役立ちます。市長のアイデアは非常にありがたく、とても参考になりました。

地域を愛する人を育てる三重大学の人財育成

司会　大学の最も重要な使命は教育です。三重大学が目指すひとづくり、人材育成についてお話しいただけますか。

内田　私はいつも、人は宝、人材の「ざい」は財産の「財」であるとメッセージを発しています。それは、やはり地域圏大学として地域に根ざし、地元に貢献できる「人財」を育てることが三重大学の重要な役割と考えているためです。既に教育界や医療界では三重大学出身者が中心的な役割を果たしてくれていますので、今度は地域企業や行政で活躍する人財をどんどん増やしていかなければなりません。そのためには三重大学を愛する愛校心を育てることです。それが県や津市に対する郷土愛にもつながり、地元に残ってこの街を良くしていきたいという気持ちのもとになるのではないでしょうか。地元が好きだからみんなで良くしていこうと行動する、そういう人財を一人でも多く育てたいと考えています。三重大学の学生は三重県出身者が4割、他県の出身者が6割いますが、三重県出身者は当然として他から来た6割の人にも、大学生活を通して郷土愛や愛校心を育んでいくことが我々の大きなテーマであると思っています。

松田　津市は合併後、新しい市民歌「このまちが好きさ」というポップでノリのいい歌をつくりました。今、学長が愛校心とおっしゃいましたが、私どももいろいろな方に自分の能力をこの街で発揮していただくには、この街が好きだという気持ちを持っていただくことが重要だと思います。先般、藤堂高虎公入府400年の記念事業を展開し、津城も再興しようと取り組みを進めていますが、この津市が中世には日本三津（三大港）の一つであったことや、市制施行も名古屋市より早かったこと、藤堂高虎公や国学者の谷川士清などの偉大な人物を輩出してきたことなどを楽しい催しを通じて知っていただくことも、この街を誇りに思うきっかけになるはずです。行政の施策はもちろん必要ですが、もっと草の根から人々の心の中に「この街が好きさ」という気持ちを持っていただきたいと考えています。

行政と大学の連携の先に地域再生の未来が見えてくる

司会　最後に、地域防災をはじめ大学と市との連携について今後の展望をお話しいただけますか。

松田　三重大学の先生方には以前から道路陥没や土砂崩れなどの災害調査にご協力いただき、包括連携協定締結後は防災を軸に連携を高め合っています。今後、防災面はもちろんですが、例えば中小企業1社では先端的な研究ができないので研究の部分を大学にお任せしたり、技術と技術の接点となるアイデアをいただいたりするなど、産学官で地域を活性化するような新しい事業の創造を推進したいと考えています。もう一つは、環境に優しいまちづくりに対して専門分野からご指導をいただくこと。さらに国際化が進み、津市にも多くの外国の方が住んでいらっしゃいますので、そうした方がご家族で住みやすく、働き手としてのマンパワーが発揮しやすいまちづくりも必要です。その際、我々だけでは言葉の壁もありますので大学や学生さんの力をお借りしたいと思っています。今までは連携することに意義があったのでしょうが、これからは結果をどう出していくかが求められます。そこを掘り下げて臨みたいと考えております。

内田　地域防災においては東海・東南海地震に対して、大学も含めこの地域がどういう対策を立てていくかが非常に重要です。既に三重大学は津市と机上訓練を実施しておりますし、「美し国おこし・三重さきもり塾」（※6）を開校して地域防災を担っていただける人財の養成に取り組み、これから予測される大災害に備えています。「さきもり塾」で育った方が各自の地域に戻っていろいろな人に情報を提供し、意識を啓発し、地域ぐるみで防災に備えられるようにしたいと思います。国際交流においては海外の方を呼び込むために、津市の持つ観光資源や大学の持つ知財や施設などを組み合わせるなど新しい企画を打ち出して、それを地域再生やまちおこしに反映させていくことも考えられるでしょうね。

松田　津市の市民防災大学でも三重大学の先生にご指導いただいていますが、やはり防災においてもひとづくりがカギなのだろうと思っています。行政も専門的な意見を参考に安全・安心のまちづくりに取り組んでいきますが、市民の皆さんにも専門家のお話をうかがって災害に対応できる準備をしていただく。こうした取り組みをいろいろな分野で実現するためにも、行政と大学の連携を当たり前のものにしていきたいと願っております。

内田　そのような防災面での連携活動は、すべての地域再生のモデルになるだろうと思っています。例えば医療も医療関係者だけ、行政だけの体制をつくるのではなく、市民が参加し一体となってその地域の医療体制をつくることが欠かせません。安全で安心、そして誰もが住みやすい社会を支える基本単位を、どうやって行政と大学とが協力して形成していくか、それが今後の課題ではないでしょうか。本日は新しい連携のアイデアもいただき、津市と大学の未来に向けて非常に有意義なお話ができました。今後もさらに連携を深め、市とともに地域の課題の解決に向けて邁進したいと思います。

司会　本日は楽しく有意義なお話を沢山いただき、ありがとうございました。

（※1）10市町村の合併
旧津市、旧久居市、旧河芸町、旧芸濃町、旧美里村、旧安濃町、旧香良洲町、旧一志町、旧白山町、旧美杉村の10市町村が合併し、新「津市」が誕生。

（※2）つ・だいもん学生マルシェ
三重大学ベンチャーサークルを中心とする学生たちによるイベント。これまで地域活性化イベントの中で関わった地域の産物や加工品などを、大門大通りの商店街の空き店舗を活用して販売した。

（※3）野村證券・百五銀行・創業革新プロジェクト研究室
三重大学と民間企業2社による大学発ベンチャー支援プロジェクト。メディカル・バイオ・アグリなどのベンチャー企業に対する戦略的な支援を研究し、選定企業に対して支援を実践している。

（※4）酒造り体験事業
2007年より市内の造り酒屋と三重大学、津市が連携し、酒造り体験事業を実施。学生が杜氏の指導のもと酒造りに挑戦し、三重大学ブランドの梅酒や純米大吟醸も誕生した。

（※5）津市げんき大学
「津を元気にするために何かしたいと想う人、活動する人」が集まるまちづくりの窓口。人のネットワークづくりや活動の支援、各種講座を展開している。三重大学は分校を開校し学生がまちづくりに参加している。

（※6）美し国おこし・三重さきもり塾
文部科学省「地域再生人材創出拠点の形成」に採択された三重県との協働事業。地域の防災・減災活動を行う人材の育成・輩出を目指す。